

サッフォーと十九世紀英国の女性詩人たち

(1) 身投げ伝説と女性の死

Sappho and British Women Poets in the Nineteenth Century

(1) Sappho's Leap from the Rock and the Death of a Woman

滝 口 智 子

Takiguchi, Tomoko

ABSTRACT

This is the first of two essays on Sappho's influence upon the works of British women poets in the nineteenth century. First, I look at the way the legend of Sappho's love for Phaon and her suicidal leap from the Leucadian Rock was passed down to the nineteenth century from ancient times. I also mention which of Sappho's works were known at that time. Second, I outline how several nineteenth-century women poets incorporated the Sappho legend in their poetry. Last, I explore what significances are hidden in the theme of a woman's death, referring to historical accounts of the Leucadian leap and Edgar Allan Poe's famous statement in his "Philosophy of Composition" that the most poetic theme is the death of a beautiful woman.

In the next essay I will discuss poems on Sappho written by Felicia Hemans, Letitia Landon, Christina Rossetti, Agnes Mary F. Robinson, and Michael Field (pseudonym for two women poets), focusing on their representations of Sappho including her death and her afterlife.

フランスの作家スタール夫人 (Germaine de Staël, 1766–1817) 作『コリンヌ、あるいはイタリア』(*Corinne ou l'Italie*, 1807) は、イタリアの才能あふれる女性即興詩人コリンヌを主人公とした小説である。コリンヌはふたつの母国イタ

リアとイギリスの間で悩み、イギリス紳士との恋に破れて死んでゆく。物語は悲劇的な結末を迎えるものの、社会との軋轢に苦しみながらも自立して生きる主人公は、ロマン派時代の新しいヒロイン像として、当時のヨーロッパの女性作家に広く影響を与えた。イギリスの詩人たちフェリシア・ヘマンズ (Felicia Hemans, 1793-1835) やレティシア・ランドン (Letitia Landon, 1802-38) も、⁽¹⁾ コリヌヌに寄せた詩を残している。

コリヌヌは、ヨーロッパに流布していた古代ギリシャの詩人サッフォーのイメージから、スタール夫人がインスピレーションを受けて創り上げた女性像だったと指摘されている (DeJean 176-77)⁽²⁾。たしかに、このヒロインの描写にはサッフォーのイメージがたびたび重ね合わされている。桂冠詩人としてカピトリウムの丘で戴冠式にのぞむ際、コリヌヌはサッフォーの後継者として称賛される。ゆるやかな白衣を身にまとい、豎琴を手に即興詩を朗誦するその姿は、古代ギリシャ・ローマの巫女に例えられ、詩神に仕えていたサッフォーを髣髴とさせる⁽³⁾。報われない恋愛の末の死という物語の悲劇的結末も、サッフォーにまつわる伝説から受け継がれている。ヘマンズとランドンは、こうしたコリヌヌ像をはじめとするサッフォーのイメージに影響を受けながら、それぞれのヒロインを描いていった。サッフォーへの関心は十九世紀の中後期にも引きつがれ、クリスティナ・ロセッティ (Christina Rossetti, 1830-94)、エリザベス・バレット・ブラウニング (Elizabeth Barrett Browning, 1806-61)、アグネス・

(1) 『コリヌヌ』がヘマンズとランドンに与えた影響については、拙著「コリヌヌの面影」を参照。

(2) スタール夫人は1811年に、失恋して海に身を投げるヒロインを描いた劇『サッフォー』を書いている。ヘレン・ボロヴィッツは、コリヌヌの人物造詣は十七世紀小説中のサッフォーから影響を受けたものだとして論じている (Borowitz, "The Unconfessed Precieuse")。なおコリヌヌは、サッフォーの後に古代ギリシャで有名だった詩人の名と同じである。

(3) 戴冠式の場面でコリヌヌは、イタリア十七世紀の画家ドメニキョの描いたシビュラのようにと形容されている。ドメニキョのシビュラの中で最も有名なのは『クマエの巫女』で、物語中でもコリヌヌの元恋人オズワルドが妻と一緒にこの作品を観てコリヌヌのことを思い出している。シビュラとは古代ギリシャ・ローマの女性預言者を指す言葉。

メアリ・F・ロビンソン (Agnes Mary F. Robinson, 1857–1944), マイケル・フィールド (Michael Field は筆名で, その作品は Katherine Harris Bradley, 1846–1914 および Edith Emma Cooper, 1862–1913 による共同制作) 等の詩作品にも, この古代詩人の作品や伝説への言及がみられる。

小論は「(1) 身投げ伝説と女性の死」と題して, 十九世紀のサッフォー伝説とその含意を考察する。まずはサッフォーに関して, 史実とは異なる伝説が古代から伝えられたことを概観し, 十九世紀のイギリスにどのようなサッフォー伝説が広まっていたのか, またサッフォーのどのような作品が知られていたかをまとめる。次に当時の女性詩人たちがどのようにそのサッフォー伝説を受けとめていたかについて触れる。最後に, サッフォー伝説にみられる女性の投身および死というテーマに, どのような含意が可能性として潜んでいたかを探る。この考察を踏まえて次回, 十九世紀イギリス女性詩人たちの作品を読み, そこに描かれたサッフォー像を調べていくことにしたい。

サッフォー：史実と伝説

十八世紀から十九世紀にかけて, サッフォーは海へ身を投げた悲劇の詩人として広く知られていた。伝説によると彼女は, アフロディーテによって美しい若者に変身させられた渡し守ファオーンに恋したという。だがその想いはかなわず, 傷心のあまりレフカスの崖へと向かう。そこは, 恋に悩むものが身投げをすることで情熱を鎮める場所だった。紀元前四世紀に活躍したギリシャ中期喜劇の作家たちが, この話を題材に劇を書いたことが知られている (Williamson 8–9)。ローマの詩人オヴィディウス (Ovid, 43 BC – AD17?) は『名婦の書簡』 (*Heroides*) 中の一編「サッフォーからファオーンへ」において, 失恋の悲しみを切々とうたえる身投げ直前のサッフォーを描いた。この作品は十八世紀初頭にアレクサンダー・ポープ (Alexander Pope, 1688–1744) によって英語韻文に翻訳されている。崖の上で竖琴を手に最期の歌をうたう詩人のイメージは人々の想像力を刺激し, 十九世紀には作家や画家・イラストレーターによる

多くの作品を生んだ (Reynolds 2003, 67-73)。

詩人の伝記において確認されうる事実は、実際にはごくわずかでしかない。サッフォーは紀元前七世紀から六世紀に生きたレスボス島の詩人で、豎琴を奏でながら詩歌を朗読していたことはほぼ間違いない。そして詩神に仕えながら、彼女の才能に惹かれて集まった少女たちに音楽や詩を教えていたと推定される。しかしその出自や家族をはじめとする古代の記述に決定的な証拠はなく、ファオーンとの恋愛や身投げもフィクションにすぎない。十九世紀後半に、歴史・文献学という科学的な立場からサッフォーの生涯と作品を紹介した注釈本『サッフォーの伝記, テクスト, 翻訳と翻案』(初版 1885 年) が出版された。編著者であるヘンリー・ソーントン・ウォートン (Henry Thornton Wharton) は、当時主にドイツで進展していたサッフォー研究の成果に基づいてこの本を編み、サッフォーの生涯に関する史実の不確かさを一般の人々に明らかにした⁽⁴⁾。しかしそれ以前は、サッフォー伝説と史実が多くの人々に混同されていたのである。

サッフォーの身投げ伝説が一人歩きしていたのに加えて、彼女の詩作品も多くは知られていなかった。彼女が生きたのは口承文学から書かれた文学への移行が進んでいた時期だった。サッフォー自身は自分の作品を記録しなかった可能性もある。しかしおそらくは、聴衆の中にその朗読をパピルスに書き留めた人々がいた。紀元前三百年ごろに創設されたアレクサンドリア図書館には、サッフォーの詩を編んだ九巻が所蔵されていたという (Williamson 1)。しかし年

(4) ウォートンの注釈本は 1885 年の初版の後、何度か改訂された。彼はアマチュア古典学者だが、イギリス読者のためにドイツにおけるサッフォー文献学の成果をわかりやすくまとめた。この注釈本は、十九世紀の人々のサッフォー理解に幾つかの点で大きな転換をもたらした。(1) サッフォーから伝説のヴェールを取り去った。(2) サッフォーの(当時の時点で)現存する詩作品を全編提示し、その多くが断片であることを知らしめた。(3) いくつかの断片についてこれまでの英訳や翻案作品を紹介することで、断片からイギリス文学作品が生まれ得る豊かな可能性を示した。(4) サッフォー詩における愛の対象を女性代名詞を用いて翻訳し、その詩作品にある同性愛を明らかにした。詳しくは、拙著「とおい昔に」(近刊)を参照されたい。

月を経て次第にそれらの作品は失われ、詩のごく一部が切れ切れに、古代ギリシャの学者・作家たちの引用によって伝わるのみとなってしまった（Reynolds 2003, 14-15）

このような状況の中、サッフォー作品の中で十九世紀に人口に膾炙していたのは事実上、「アフロディーテ賛歌」と「かの人は神にも見えて」の二詩篇のみだった（Reynolds 2003, 111）。現存する作品の大半がごく短い断片でしかなかったのに対して、これらはほぼ完全な形で読むことができる数少ない詩篇であった（前者は完全な詩篇、後者も欠損はあるがほぼ完全版と考えられる）。この二編については、ジョゼフ・アディソン（Joseph Addison, 1672-1719）が1711年に『スペクテイター』誌に翻訳を解説つきで紹介したのを始めとして、その後もたびたび英語翻訳が行われていた。しかしそれ以外のサッフォー断片詩にギリシャ語を読まない者が親しむ機会、断片を一冊にまとめ英訳を施したウォートンの注釈本の出版以前は、限られたものでしかなかった⁽⁵⁾。

二十世紀以前の女性たちは教育上の制限もあったので、その多くがギリシャ語を読まなかったと考えられる。折々に紹介されたサッフォー作品の英訳を読んでいた可能性はあるが、それらはサッフォーの愛の対象を（故意に）男性に変更しているものが多かった⁽⁶⁾。そのためファオンとの恋愛伝説も相まって、サッフォーはおもに異性愛の詩人として捉えられていた⁽⁷⁾。

サッフォー伝説とイギリスの女性詩人たち

こうして十九世紀の作家や画家は、実在のというよりは伝説のサッフォーの魅力に捉われて、身投げ直前の彼女の姿を繰り返し描いていた。正確には十九世紀ではないがその前夜に、メアリ・ロビンソン（Mary Robinson, 1757

(5) 1890年以降にエジプトのオクシュリユンコス他の地で、古代ギリシャの文芸作品を含むパピルスや土器・陶器の破片が発掘された。その中にサッフォー作品の新たな発見もあった。ただしそれ自体紀元二～三世紀のもので、サッフォーの死後かなりたってから記されたものである（Reynolds 2003, 8）。

-1800) が『サッフォーとファオン』(*Sappho and Phaon*, 1796) と題したソネット集を発表している。序文に添えた「サッフォーについての解説」でロビンソンは、フランス人作家ジャン・ジャック・バルテルミ (Jean-Jacques Barthélemy, 1716-95) の旅物語におけるサッフォーの記述を紹介している。⁽⁸⁾ そこではサッフォーとファオンの悲恋、詩人のレフカスの崖からの身投げが、まるで史実であるかのように語られている。⁽⁹⁾

ロビンソンは同序文で、オヴィディウスを英訳したポープの「サッフォーからファオンへ」に触れ、彼らのサッフォーには「暗い影がつきまとい、このギリシャ詩人の美を引き立てるというよりも貶める傾向がある」と述べている (Robinson 18)。⁽¹⁰⁾ 彼女はそう感じた理由を説明していない。しかしオヴィディウス／ポープの作品に描かれた錯乱するサッフォーの姿は、たしかに貶められた描写と言えるかもしれない。彼らのサッフォーはファオンの甘い抱擁を思

- ✓ (6) たとえば『アフロディーテによせて』の John Addison による 1735 年訳はサッフォーの恋人を “a coy youth” と男性に置き換え、Francis Fawkes の 1760 年訳は勝手に恋人に Phaon という名を与えている (Reynolds 2000, 21-22)。オヴィディウスの『サッフォーからファオンへ』の英語訳は、サッフォーの元恋人を女性代名詞として残したものが多かったが、一般的には男性であるファオンとの恋物語が広まっていた (Jay & Lewis 21)。

十八世紀から十九世紀終わりにかけてフランス、ドイツ、続いてイギリスでサッフォー研究の進展があり、英語への翻訳もいくつか出版された (Reynolds 2003, 14 and 111)。ギリシャ語を読むテニスンは、若い頃に友人 Arthur Hallam とともにサッフォー詩の断片に親しみ、その官能性から影響を受けて詩作を行った (Peterson 126)。ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティは “One Girl: A Combination from Sappho” というタイトルで 1870 年にサッフォーの断片を翻訳、発表している (Wharton 105)。

- ✓ (7) マーガレット・レノルズは、サッフォーが異性愛者とされたことの要因として、この時期の女性詩人たちは社会的に形成された男性と女性の違いへの意識が高かったことを挙げている (Reynolds 2003, 109)。
- (8) バルテルミ作の古代を題材とした旅物語『若いアナカルシスのギリシャ旅行』(*Voyage du jeune Anacharsis en Grèce*, 1787) については Reynolds 2003, 172 を参照。
- (9) バルテルミ自身が著書の序文で「旅行記なのだから、史実でただ暗示しかされていないこと、歴史家は書くのを許されないことを書いた」と述べている (Joan DeJean, 138-40)。
- (10) オヴィディウスの作品については Greene 106-108 を参照。マーガレット・レノルズはこの作品は冗談のような調子があり、サッフォーの声を乱用することで「彼女の署名を捏造した」と述べている (Reynolds 2000, 73)。

い起こしては身にまとった衣類を破り、胸をかきむしる。我を忘れて彼への哀願を繰り返すなど、自尊心を失った様が描かれる。さらにこのサッフォーは、自分のもつ詩の才能を認識する一方で、ことさらに自分の美しいとは言えない容姿を話題にし、ファオーンの美しさと比べることで自らを貶めている。それに対してロビンソンの描くサッフォーは、ファオーンへの情熱に駆られて滅んでいく結末は同じでも、彼に対して誇りをもち続けている。ファオーンに向けた「戻るがいい」という呼びかけは、哀願というよりもむしろ立場が上の者からの訓告として響く。彼女はオヴィディウス／ポープのサッフォーとは対照的に、彼に去られたつらさを欲求不満として表現してはいない。むしろ自分の苦しみや怒りを大海原の浪、火山噴火の激しさなどの内部からわき出でるイメージとして表現することで、創作力に高めている（Sonnets 22 and 23）。

ロビンソンの作品は形式面でもオヴィディウス／ポープの作品と異なっている。書簡体形式をとる後者の作品はサッフォーの詩才の衰えを強調して、失恋が彼女にもたらした変化をこのように記した。

Love taught my tears in sadder notes to flow,
And turn'd my heart to elegies of woe.

(Pope, lines 7-8)

愛は私に 悲しい調べにのせて涙を流すように教え
嘆きながら哀歌をうたうように 私の心を変えた

ロビンソンは、あえてこの詩行を自作のソネット集のエピグラフとすることで、オヴィディウス／ポープと自分との違いを明確にしているように見える。ジェローム・マッギャンが示唆するように、彼らのサッフォーが崇高な調子を捨てて個人的な悲しみをうたうのに対して、ロビンソンのサッフォーはイタリア風ソネットの形式を用いることで、自分の作品が伝統に則った高尚な文学だと宣

言している (McGann 102-03)。その宣言は同時に、自分は愛する男性に拒絶されたとしても創作力が衰えることはなく、その経験を糧にしてさらに高みに上ることができる詩人だという主張でもあろう。

オヴィディウス／ポーブとロビンソンの例にみてとれるように、当時流布していた伝説のサッフォー像は、描き方や解釈しだいで衰退する女性としても、あるいは高められた女性としても表象されうる多義的なイメージだった。そうしたイメージを受け継いだ十九世紀女性詩人たちの中に、レティシア・ランドン、フェリシア・ヘマンズ、そしてクリスティナ・ロセッティがいた。⁽¹¹⁾ ランドンは1822年に『リテラリー・ガゼット』(*The Literary Gazette*)において「サッフォー」(“Sappho”)を、1824年に詩集『即興詩人その他の詩』(*The Improvisatrice and Other Poems*)の巻頭長編詩において劇中歌「サッフォーのうた」(“Sappho’s Song”)を発表している他、サッフォーと銘打ってはいないが失恋して死んでゆく女性の詩を多く書いている。彼女はロビンソンと同じく「イギリスのサッフォー」と呼ばれた⁽¹²⁾ (Prins 197)。

ヘマンズが「サッフォーの最期のうた」(“Sappho’s Last Song”) (1831)を書いたのは、1834年出版の *National Lyrics and Songs for Music* に掲載されたこの詩のエピグラフによると、「Richard Westmacott の描いた美しいスケッチを

(11) ロビンソンの『サッフォーとファオン』よりもスタール夫人の『コリンヌ』の方が後世への影響力は大きかったと指摘されている (Reynolds 2003, 109-11)。ジェローム・マッギャンによれば、『サッフォーとファオン』は「サッフォーの伝統においてイギリスで最も重要な貢献」ではあるが、「ロビンソン以後のサッフォーの描写に影響を与えることはほとんどなかった」 (McGann 94)。ただし私は、オヴィディウス／ポーブによる「貶められた」サッフォーと比べるならば、ロビンソンの描いたサッフォーの方が、十九世紀女性詩人の描くサッフォーに近いと考える。私はランドン、ヘマンズ、ロセッティがロビンソン作品を読んでいたという証拠を見つけることはできなかった。しかし C.C. バーフットは、この作品とロセッティの「晩年に」(“Later Life”) がともにソネット連作である点に注目し、両者に見られる「エロティックな力」に類似性を見出している (Barfoot 2006)。

(12) ランドン作品の出版年度や初出に関しては、*Letitia Elizabeth Landon: Selected Writings* に収められた “Index to the Poetry of Letitia Elizabeth Landon” (eds. Glenn Dilbert-Himes and Cynthia Lawford) を参照。

見て触発された」のがきっかけであった。そのスケッチではサッフォーが海上の崖に腰下ろし、豎琴をかたわらにうち捨てている。ヘマンズは諦念に身を任せた彼女の美しさに魅せられたという (Hemans 466-67)。このほかにもヘマンズは、ファオンに捨てられたサッフォーを描いた John Gibson 作の彫刻にも強い感銘を受けている。ヘマンズは「柳の枝がしな垂れるようなサッフォーの姿は、言い表せないほどの悲しみを伝えている。投げだした手に持った豎琴を、今にも落としてしまいそうだ」と記し、「女性にとっての名声の空しさを痛いほど悲しげに表している」とその美を称えている (Chorley 198)。さらに、彼女はフランツ・グリルパルツェル (Franz Grillparzer, 1791-1872) 作の劇『ザッフォオ』(1818) を読んでいた。そして友人への手紙のなかで、靈感をもつ詩人として生きることをやめて、俗世界の恋愛に溺れたことを後悔しつつ身投げするサッフォーを描いたこの作品を「お気に入りのひとつ」と述べ、「美しさと…真実に満ちており、想像で豊かに色づけて、哀れみを誘うように明晰に描ききっている」と絶賛している (Chorley 111)。

クリスティナ・ロセッティもサッフォーをヒロインとする詩を二編残しており、そのひとつには「サッフォーが身投げで死なずに助かっていたら語っただろうこと」という、身投げ伝説をパロディーにしたようなタイトルがつけられている⁽¹³⁾。

身投げの多義性、詩の主題としての女性の死

サッフォーの身投げ伝説はなぜこのように十九世紀の人々、なかでも女性詩人たちを惹き付けたのだろうか。ヘマンズはなぜ、サッフォーの哀れみを誘う描写に「美」と「真実」を見いだしたのか。そこにはどんな意義がひそんでいたのだろうか。

前節でも少し触れたように、女性の身投げと死にはいくつもの意義が考えら

(13) “What Sappho would have said had her leap cured instead of killing her” (*The Complete Poems*, vol. III, 166-67) .

れる。それは悲しみと絶望の表現でもあれば、死によって現世・社会から解放されたいとの思いでもあるかもしれない。死への志向は屈服や創作力減退を示すのかもしれない。歴史的な視点に立てば、罰則、神への供物、治療という意味を見出すこともできる (Reynolds 2003, 68 and 121)。サッフォーの時代、レフカス島からの身投げは失恋した者が自殺する手段、あるいは情熱を鎮めるための、いちかばちかの治療として知られていた。この認識自体さらに昔の民衆の習慣 — 犯罪者が、アポロ神の機嫌を治すために生贄として崖から突き落とされる儀式 — に基づいて生まれたものだという (Reynolds 2000, 71)⁽¹⁴⁾。それゆえ身投げには社会の掟を破った者への制裁、同時に神への供物としての犠牲という含意がつきまとう。

十九世紀にもこのような罰則の含意は、多かれ少なかれ受け継がれていた。その例として、たとえば『アンテノールのギリシャとアジア旅行記』(*The Travels of Antenor in Greece and Asia*, 1799) という作品がある。ここにはサッフォーが罰を受けるという暗示がある (DeJean 140-41)⁽¹⁵⁾。この旅行記は、バルテルミの後継者とされるエティエンヌ・フランソワ・ランティエ (Étienne François de Lantier, 1734-1826) が、バルテルミの旅行記から10年もたたない間に書いたもので、サッフォーの記述に関してもその影響がみられる。ランティエはバルテルミと同じく、サッフォーをハルカリナッソスの女王アルテミシアに例えている。アルテミシアは歴史家ヘロドトスの記述によれば、ペルシア戦争において女性武将として戦い、サラミスの戦いでギリシャ人に勝利したという。ランティエはこの物語に加えて、アルテミシアが若い男に捨てられたため嫉妬と復讐心に駆り立てられて、眠ったふりをして裏切り者に近づき、彼の目をくりぬいたというエピソードを加えている。アルテミシアはその後、絶望のあまり崖から身投げをして息絶えたという。ランティエは、ここにはサッフォー

(14) 沓掛良彦によれば、古代ローマの地理学者・歴史家ストラボン (Strabon, 63? - 23? BC) の書いた『地誌』にこうした記述がある。『サッフォー：詩と生涯』302 - 03 頁を参照。

(15) サッフォー伝説における罰則の含意については Reynolds 2000, 184 - 88 も参照されたい。

の運命との類似があると語る。ジョーン・ドゥジャンの言葉を借りるなら、彼は「女性が本来は男性のものであるはずの分野で活躍する話に、暴力的なエピソードを加えることで、女性の進出は父権社会を揺るがしかねないという警告を発している」(DeJean 141)。つまりこの物語は、アルテミシアとサッフォー両者の身投げに、社会の決まりから逸脱して名声を獲得した女性への、社会からの罰という含意を与えているのだ。

サッフォーが社会的な制裁を受けたという含意は、彼女の身投げを描いた様々な十九世紀の作品に影を落としていたことだろう。当時のイギリスで女性が芸術家として絵画を発表したり、詩や小説を出版したりすることは盛んに行われていた。だがそこには多くの場合、女性として適切な行動ではないと考えられる危険があった。⁽¹⁶⁾ましてやサッフォーは、イギリスではほとんど見られない即興のパフォーマンスを行う詩人だった。⁽¹⁷⁾即興は創作するときの体、顔、声による身体表現が逐一聴衆に見られ、しかも詩の才能や感情を含む内面が公開される場である。その特質が、女性が公に身をさらすという危うい側面を強調したのは間違いない。

しかしその一方で、十九世紀イギリスのすべての女性たちが自己を抑えて受動的に生きていたと判断するのは、実情を正確に捉えていない。たとえばある程度の財産を相続した上流階級の女性たちは、男性に頼らず自立することが可能だった。中流階級の女性たちは、ガヴァネスになるなどの方法はあっても、就くことのできる職業が限られていたため、多くの場合は周りの男性に依存するという選択肢しかなかった。ただその場合でも、それぞれの状況を最大限に

(16) ヤン・マーシュは、十九世紀に芸術家として成功するために必要とされた資質は、女性にもつべきと考えられた「慎み深さ、控えめであること、私利私欲のないこと」といった資質とはかけ離れていたと指摘している (Marsh 33-34)。

(17) 十九世紀イタリアでは多くの即興詩人が活躍していたが、その職業はイギリスでは品位あるものとはみなされていなかった。そのため、イタリアからイギリスに亡命した元即興詩人であるクリスティナ・ロセッティの父親は、イタリア語教師として生活した (Marsh 1994, 24)。即興詩人について詳しくは、*British Romanticism and Italian Literature*, eds, Laura Bandiera and Diergo Saglia, pp.165-192 を参照されたい。

活用して、慈善活動を行うなど積極的に生きた者もいる（Gleadle 51-94, 139-86）。また、職業人としての女性作家の活躍も（制限はあるにせよ）目覚しいものがあつた。そのようにある程度自分の意志を通していたからこそ、社会の理想から逸脱して生きた伝説上のサッフォーに感銘を受ける女性がいた、と考えても不思議ではない。とすれば、サッフォーの身投げは多くの女性にとって、自己の内なる要求に従った結果としての英雄的な行為に見えたのではないだろうか。そしてそう考えたとき、サッフォーの身投げは社会に対する挑戦的な身振りとなり、女性の主体性のパフォーマンスと捉えることも可能であろう。

十九世紀にはサッフォー伝説に限らずとも、女性の死が詩や小説によく描かれた。エリザベス・ブロンフェンはその著『死んだ女の身体』の序文において、女性の死という主題には、他者としての女性の死を見ることで、人が心の中で抑圧したい死への怖れを克服し、自分の不滅性を感じたいという無意識の欲求がひそんでいると指摘している（Bronfen x-xv）。そうだとすれば、女性詩人が女性の死について書くことには、女性の死の描写を見つめる（男性）社会の視点を内面化し、彼らの欲求を満たそうとするマゾヒズムに陥る危険性がないとは言えない。

ただしブロンフェンは、詩における女性の死を字義通りに解釈し、実際の暴力と同等の非倫理的な主題だと批判することには、慎重に警告を発している（Bronfen 59-60）。彼女はエドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe, 1809-49）の詩論「構成の原理」における、しばしば女性差別的とみなされる悪名高い言説「最も詩的な主題は美しい女性の死である」をとりあげる。そして、それを実際の女性の死を喜ぶ態度の表明というよりは、効果的な詩を創るための詩学だと捉えている。ブロンフェンは、この言説には「生きている身体を無生物のテキスト」に変容させることで生まれる審美的な詩学があると示唆する。

ポーによれば、「詩の唯一の正統的領域」は詩の望ましい効果である「美」だ。美の観照こそ最も強く純粋な喜びをもたらし、魂を高めてくれる。そして美に最高の表現を与える調子（トーン）は悲哀・優秀であり、あまねく人に理解さ

れうるところに従えば、憂愁のなかでも最も悲しいのは死である。ポーはさらに、この憂鬱な主題が最も詩的なのはどのような時かと自問し、死と美が最も密接に結びついている時であると考え。こうしてポーは、美しい女性の死こそが最も詩的な主題だと結論づけ、この原理に従って詩作品「大鴉」を創作したと説明している（ポオ『詩と詩論』224-27）。

ブロンフェンは、ポーが「美しい女性の死が最も詩的である」と言う際に、何故「最も」という最上級を使うのかと自問し、次のように考える。女性は死ぬことによって詩の主題となり、表象の客体となる。つまり動かなくなった女性の死体は、鑑賞し味わうための芸術作品に匹敵するものになりうる。このとき、女性の死にゆく様は芸術創作の比喩となり、「美しい女性の死」はテキスト自体を映し出す自己言及的な瞬間を作りだす。この自己言及的な瞬間をブロンフェンは「合わせ鏡に映る無限の自己」と表現し、記号（死んだ女性の描写）と記号内容（実在としての死んだ女性）が最も分離した状態だと示唆している。ロマーン・ヤコブソンによれば、言葉（記号）が記号内容を離れて、記号それ自体を重んじるのが詩的言語の機能である。それゆえ美しい女性の死が描かれるとき、作品から実在の女性という記号内容が最も分離した状態となり、結果としてそれがポーのいう「最も詩的な」主題となる、とブロンフェンは説明する（Bronfen 71-73）。

詩における女性の死というテーマはこのように、実際の女性の死という字義的意味内容を離れて、詩的言語として数多の象徴的意味を生み出す大きな可能性をもっている。しかしブロンフェン自身が認識しているように、それでもなお、ポーの詩論にひそむ比喩的な意味と字義的な意味との間の「不安定な関係」が完全に解消することはない（Bronfen 59）。つまり、言葉の比喩的な意味と字義的な意味は根本的に異なるものだとしても、あるテキストのなかでそのふたつの重なり合いが起こる瞬間がありうることを否定はできない。たとえば女性の死が「詩的」つまり比喩的・象徴的に描かれていたとしても、憂鬱で美しいイメージとして表現されたとしても、死んでゆく女性の痛み、苦しみをあたか

も実在の人間のものとして感じる事がまったくないとは言い切れない。それゆえ詩における女性の死が、ときに女性（詩人）の諦念、悩み、苦しみ、怒り、抗議という様々な感情を伴う生々しい現実を映し出すことも、ありうるのではないだろうか。

以上のようなサッフォーの身投げ、そして女性の死に関する様々な含意や詩的機能、現実との重なり合いの可能性等を踏まえながら、今回の論でランドン、ヘマンズ、クリスティナ・ロセッティ、その他の詩人の作品を読んでいくことにしよう。前者ふたりの詩人が伝説上のサッフォーの身投げを描き、その死を暗示したのに対して、ロセッティはパロディー風のタイトルをもつ詩のなかで、身投げ後に生き残ったサッフォーの未来を描いた。彼女は伝説の筋書きに改訂を加えたのだった。

参考文献

- Bandiera, Laura and Diergo Saglia. Eds. *British Romanticism and Italian Literature: Translating, Reviewing, Rewriting*. Amsterdam and New York, Rodopi, 2005.
- Barfoot, C.C. "In This Strong Labourinth How Shall I Turn?" *"And Never Know the Joy": Sex and the Erotic in English Poetry*. Amsterdam and New York: Rodopi, 2006.
- Borowitz, Helen. "The Unconfessed Precieuse: Mme. de Staël's Debt to Mlle. de Scudery", *Nineteenth-Century French Studies* 11 (1982-83): 32-59.
- Bronfen, Elisabeth. *Over Her Dear Body: Death, Femininity and the Aesthetic*. New York and Manchester: Manchester UP, 1992.
- Chorley, Henry F. *Memorials of Mrs. Hemans, with illustrations of her literary character from her correspondence*. Philadelphia: Carey, Lea & Blanchard, 1836.
- De Lantier, Etienne François. *The Travels of Antenor in Greece and Asia: from a Greek Manuscript found at Herculanium*, translated from the French of E. F. Lantier. London: T. N. Longman and O. Rees. 1799.
- De Staël, Germaine. *Corinne; or, Italy*. Trans. Isabel Hill. Metrical Versions of the Odes by L. E. Landon. New York: Hurst & Co., Publishers [c.1833].
- DeJean, Joan. *Fictions of Sappho: 1546-1937*. Chicago: Univ. of Chicago Press, 1989.
- Gleadle, Kathryn. *British Women in the Nineteenth Century*. New York: Palgrave, 2001.
- Greene, Ellen. Ed. *Re-reading Sappho: Reception and Transmission*. Berkeley: Univ. of California Press, 1996.

- Hemans, Felicia. *Felicia Hemans: Selected Poems, Letters, Reception Materials*. Ed. Susan J. Wolfson. New Jersey: Princeton UP, 2000.
- Jay, Peter and Caroline Lewis. Eds. *Sappho Through English Poetry*. London: Anvil Press Poetry Ltd, 1996.
- Landon, Letitia Elizabeth. *Improvisatrice; and Other Poems* by L. E. L. London: Hurst, Robinson and Co. 1824.
- . *Letitia Elizabeth Landon: Selected Writings*. Eds. Jerome McGann and Daniel Riess. Ontario: Broadview Press, 1997.
- Marsh, Jan. “Art, Ambition and Sisterhood in the 1850s”. *Women in the Victorian Art World*. Ed. Clarissa Campbell Orr. Manchester: Manchester UP, 1995. 33–48.
- . *Christina Rossetti: A Writer's Life*. New York: Viking, 1994.
- McGann, Jerome. *The Poetics of Sensibility: A Revolution in Literary Style*. Oxford: Oxford UP, 1996.
- Peterson, Linda H. “Sappho and the Making Tennysonian Lyric”. *ELH* 61 (1994) : 121–37.
- Poe, Edgar Allan. “The Philosophy of Composition”. American Studies at the University of Virginia. Hypertexts. (<http://xroads.virginia.edu/~HYPER/poe/composition.html>).
- Pope, Alexander. “Sappho to Phaon, from the Fifteenth of Ovid's Epistles”. *The Poetical Works of Alexander Pope*, volume 2. BiblioBazaar, 2006, 71–77.
- Prins, Yopie. *Victorian Sappho*. Princeton: Princeton UP, 1996.
- Reynolds, Margaret. Ed. and Introduction. *The Sappho Companion*. London: Chatto & Windus, 2000.
- . *The Sappho History*. New York: Palgrave Macmillan, 2003.
- Robinson, Mary. *Sappho and Phaon*. Otley: Woodstock Books, 2000. Rpt. of 1796.
- Rossetti, Christina. *The Complete Poems of Christina Rossetti, A Variorum Edition*. Ed. R. W. Crump. 3 vols. London: Louisiana State UP, 1986–1990.
- Wharton, Henry Thornton. *Sappho: Memoir, Text, Selected Renderings and a Literal Translation*. New York: Brentano's, 1920.
- Williamson, Margaret. *Sappho's Immortal Daughters*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1995.
- 杵掛良彦 『サッフォー：詩と生涯』 東京：平凡社 1988 年
- グリルパルツェル 『ザッフォオ』 実吉捷郎訳 岩波書店（岩波文庫）1953 年
- 滝口智子 「コリンヌの面影—スーアル夫人、フェリシア・ヘマンズ、レティシア・ランドンの間テクスト性」『北海道英語英文学』第 50 号（平成 17 年）
- . 「とおい昔に—十九世紀のサッフォー研究とマイケル・フィールド」『英文学と科学』（仮題）文学と評論社編 英潮社 近刊
- ポオ, エドガー・アラン 『詩と詩論』 福永武彦他訳 東京創元社 2000 年

